

# オオハクチョウ 英:Whooper Swan 学:Cygnus cygnus

## 1. 分類と形態

分類: カモ目カモ科

全長: 1279-1526mm 翼長: 560-648mm  
 尾長: 160-216mm 嘴峰長: 92-116mm  
 ふんばり長: 98-125mm 体重: 6750-12637.5g  
 ※ 榎本 (1941) による。

### 羽色:

全身白色で、足は黒い。くちばしは先端が黒く、付け根から鼻孔の先まで黄色い。似ているコハクチョウでは黄色の部分より小さく、鼻孔の手前までが黄色い。幼鳥は全身灰色で、くちばしの成鳥では黄色い部分が薄いピンク色をしている。コハクチョウの幼鳥は同じ部分がより濃いピンク色。また秋の渡り当初はピンク色の部分が大きく、鼻孔よりさらに先まで届いている。この時期はコハクチョウとの識別が難しい。



写真1. 成鳥



写真2. 秋に飛来した頃の幼鳥(クッチャロ湖10月下旬)  
Photo by 小西敦

### 鳴き声:

つがいのコミュニケーションなどで、お互いに首を交差させながらコオーコオーと大きな声で鳴き交わす。陸上や水面に群れているときには、コッココという小さめの声を出していることがある。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

繁殖地はユーラシア大陸北部と周辺の島々で、西はアイスランド、東はロシア極東地域とアリューシャン列島西部まで分布している。主な繁殖環境はタイガ地帯だが、1980年代以降は極地のツンドラ地帯へも繁殖分布を広げている。越冬地は西ヨーロッパからアジアにかけてで、東アジアではカムチャツカ半島、日本、韓国、中国で越冬している。日本の越冬地は北海道東部から関東にかけての太平洋側で、特に福島県以北に数が多い。

### 生息環境:

繁殖地は乾燥帯のステップ(草原)からタイガの樹林帯、タイガからツンドラへの遷移帯までを利用し、水辺の近くで営巣する。越冬地では、内陸の湖沼や湿地、沿岸域を採食地やねぐらとして利用する。日本では刈り入れ後の水田でも採食する。

## 3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月  
 渡り 繁殖期 渡り 非繁殖期

### 繁殖システム:

一夫一婦で、どちらかが死ぬまでつがいが継続する。2~4歳でつがいが形成され、最初の繁殖は4~6歳で行われる。メスの方が成熟が早い。繁殖地で非繁殖個体は群

れを形成するが、群れのサイズは地域により異なり、10羽以下の場所から数百羽に達する場所まである。個体群に占める非繁殖個体の割合は高く、30~95%の個体が繁殖に参加しないか繁殖に失敗している。

### 巣:

付近の植物を使って、高さ41cm、底部直径1.1~2.8mほどの塚のように盛り上がった巣を作る (Brazil 2003)。

### 卵:

5月末から6月初めに産卵する。一腹卵数は4~5個。大きさは長径110mm、短径70mm、重さは約300g。

### 抱卵・育雛期間:

抱卵期間は31~35日で、メスが抱卵を行う。オスはほとんど抱卵しないが、巣やメスに近づくものに対して防衛行動をとる。ヒナは早成性で、ふ化後2~3日で巣をから離れ、3か月ほど経つと飛べるようになる。親子は翌年の繁殖期前まで一緒に行動する。



写真3. オオハクチョウの家族

### 渡り:

秋は10月中下旬に北海道東部に飛来し始め、11月に入ると本州でも数が増えてくる。春は2月上旬に本州で数が減り始め、北海道では東部と北部で5月上旬まで姿が見られる。2009~2012年にかけて、屈斜路湖と伊豆沼・内沼で発信機を取り付けた47羽のオオハクチョウの追跡が行われた (Shimada *et al.* 2014)。伊豆沼・内沼のオオハクチョウ



図1. 衛星追跡で判明した重要な生息地。○中継地, ■渡り終了地点 (Shimada *et al.* 2014を改変)

は、春は雪解けを追って徐々に北上したが、秋の渡りでは北海道を経由せずにロシアの中継地から直接伊豆沼に飛来した。こうした中継地点の違いはあるが、追跡した個体はいずれも基本的には春と秋でほぼ同じルートを往復していた。また、北上川、風蓮湖、野付半島、網走湖、アニワ湾、アムール川河口が重要な中継地になっていること、そして森林からツンドラへの遷移帯であるインディギルカ川 (Indigirka) 中流域とコリマ川 (Kolyma) 下流域が繁殖地であることが判明した。

## 4. 食性と採食行動

日本で越冬しているオオハクチョウは、沿岸域ではアマモ、内陸湿地ではマコモやレンコン、湿地周辺の草本類を採食する。農地では水田の落ち籾や、トウモロコシの落穂

を食べる(嶋田 2007, 渡辺 2011, 渡辺ら 2008). ただし水田が主な採食地になっているコハクチョウに比べると, 自然の水辺環境で採食することが多いようだ.

イギリスでは, 20世紀前半までは湿地や沿岸で水生植物を採食していたが, 1960年代から頻りにジャガイモ畑や小麦畑で採食するようになった(Robinson *et al.* 2004). 農地での採食はヨーロッパの他の越冬地でも起きており, 後述するように個体数増加の一因となっている可能性がある.

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

### ● 個体数の増加

日本では1980年代から2000年代半ばにかけてオオハクチョウが増加し, 韓国でも1999年に越冬期調査が始まって以降, 2000年代は毎年増加傾向が続いていた. 極東ロシアの繁殖地では1990年代から繁殖域の拡大が確認されており, それまで森林からツンドラへの遷移帯に存在していた繁殖地が北上し, 北極圏でも繁殖するようになってきている(Syroechkovski 2002). 西ヨーロッパの越冬地や, 北欧やロシア西部の繁殖地でも個体数の増加が報告されている. 増加原因は完全には明らかでないものの, 越冬地において農地で採食するようになって栄養状態が改善されたこと, そして温暖化により, 越冬地の積雪が減少したこと, また繁殖地においても繁殖可能な期間や地域が拡大したことが指摘されている.

### ● 幼鳥が多い年は繁殖期の気温が高い年?

1983~2009年の青森県における幼鳥と成鳥の個体数と, 衛星追跡で分かっている渡りの中継地や, ロシアの繁殖地の気温と積雪などの気象条件を比較したところ, 繁殖地の5月の気温が高い年は, 青森県の越冬個体群の幼鳥率が大きく, 青森県における前年の積雪量が多い年には, 幼鳥率が低くなる傾向が見られた(図2)(Koyama *et al.* 2013). このことは間接的にだが, 長期的な気温上昇が繁殖成功に結びつくことを示唆している.

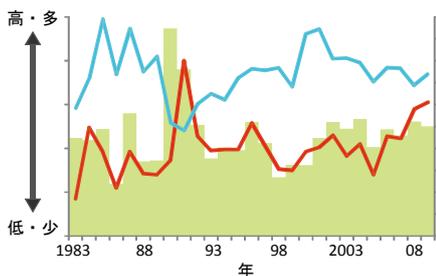


図2. 青森で越冬するオオハクチョウの幼鳥率と繁殖地の5月の気温および青森県の昨冬の積雪量.

### ● 日本の越冬地の重要性

大陸にはハクチョウ類が越冬できる場所がもっと他にもありそうな気がするのだが, 東アジアで越冬するオオハクチョウの約8割とコハクチョウの約4割が小さな島国である日本で越冬する(図3). 韓国は冬の気候が寒冷なためか, コハクチョウはほとんど見られない. オオハクチョウは越冬しているが, 日本に比べると個体数は少ない. 中国では, 日本や韓国と同緯度の黄海沿岸の一部でオオハクチョウが越

冬しているが, 内陸では湖沼が凍結するためか, 大きな越冬地は見られない. 南へ下った長江中流域にはコハクチョウの越冬地がある(Cao *et al.* 2010). 中国のハクチョウ類は, 日本やヨーロッパのように採食地として農地を利用することがなく, 開発を免れた自然地域で見つかっていない. このことも, 広大な面積のわりには中国の越冬地が少ない理由だと考えられる.

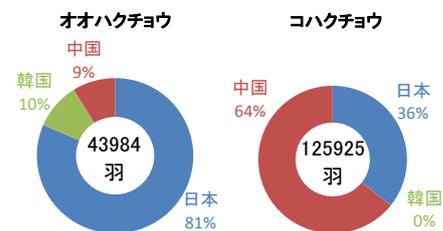


図3. 2005年1月の日本, 韓国, 中国のハクチョウ類の越冬個体数.

## 6. 引用・参考文献

- Brazil, M. 2003. The Whooper Swan. T. & A.D. Poyster, London.
- Cao, L., Zhang, Y., Barter, M. & Lei, G. 2010. Anatidae in eastern China during the non-breeding season: Geographical distributions and protection status. *Biological conservation* 143: 650-659.
- 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
- Gerasimov, N. N. 2001. Survey of Whooper Swan wintering in Kamchatka. *The Swans in Japan* 25: 26-29.
- Koyama, K., Kasahara, S. & Abe, S. 2013. Effects of the climatic conditions of breeding, stopover and wintering sites on the number of juvenile Whooper Swans *Cygnus cygnus* wintering in Japan. *Ornithol. Sci.* 12: 107-115.
- Robinson, J. A., Colhoun, K., Mcelwaine, J. G. & Rees, E. C. 2004. Whooper Swan *Cygnus cygnus* in Britain and Ireland 1960/61 - 1999/2000. *Waterbird Review Series, The Wildfowl & Wetlands Trust/ Joint Nature Conservation Committee, Slimbridge.*
- 嶋田哲郎. 2007. 水田生態系に於けるマガン, オオハクチョウの環境利用. 伊豆沼・内沼研究報告 1: 27-34.
- Shimada, T., Yamaguchi, M. N., Hijikata, N., Hiraoka, E., Hupp, W. J., Tokita, K., Fujita, G., Uchida, K., Sato, F., Kurechi, M., Pearce, M. J., Ramey, M. A., Higuchi, H. 2014. Satellite tracking of migrating Whooper Swans *Cygnus cygnus* wintering in Japan. *Ornithol. Sci.* 13: 67-75.
- Syroechkovski, E. 2002. Distribution and Population Estimates for Swans in the Siberian Arctic in the 1990s. *Waterbirds* 25 (Special Publication 1: Proceedings of the Fourth International Swan Symposium 2001): 100-113.
- 渡辺朝一. 2011. 越後平野弁天湖で観察したオオハクチョウの食餌植物3種. *新潟県生物教育研究会誌.* 46: 11-14.
- 渡辺朝一, 渡辺央, 山本明, 清水幸男. 2008. 池沼におけるガン・ハクチョウ類の食物としてのマコモの重要性と種による採食方法の違い. *日本鳥学会誌* 57: 97-107.

## 執筆者

神山和夫 バードリサーチ

バードリサーチでガンカモ調査のコーディネートをしています. 当初はそれほどハクチョウに関心はなかったのですが, 親子と一緒に暮らす姿を見て, じんわり好きになりました. 普段はハクチョウもおらず, カモも少ない東京で, パソコンに向かって, 皆さんから届くデータの整理をする毎日です.

